生活行為向上マネジメントの使用により農業を再獲得ができた一症例

One case that could re-acquire the agriculture through the use of management tool for daily life performance

Key words：生活行為向上マネジメント　共有　自己効力感

医療法人社団和風会　橋本病院
纐纈　功（OT）
田邊　夏美（OT）
宮本　美恵子（Ns）
橋本　康子（MD）

【序論】

作業療法士（以下OT）は、対象者から要望を聞き取り目標設定し、日々、作業療法に取り組んでいる。日本作業療法士協会が作成した生活行為向上マネジメント（以下MTDLP）は、対象者の要望から主体的な目標を設定し、現状能力と問題点を挙げ、予後予測を文字にして伝えることができる。また、作業療法プログラムに関しても具体的な内容を挙げるため、対象者にも分かり易くなっている。作業療法の「見える化」により、一症例を通して行なった作業療法について以下に報告する。

【目的】

農業を仕事としていたケースが、今回の発症により今後も農業が出来るか不安に思っていた。そのケースに対して、MTDLPを使用しOT評価から、「休憩しながらでも家族の支援で農業が行なえるようになる」を同意した目標として設定した。ケースと目標を共有し、農業獲得のために必要な作業療法プログラムを説明し取り組んだ。一つ一つ目標を達成していったことが、自己効力感を高めることにつながり、農業の再獲得ができたため経過について以下に報告する。

【方法】

モデルケース1名に対し、MTDLPの書式にある、生活行為聞き取りシート、生活行為向上マネジメントシートを入院初期から使用し作業療法を行なった。

【事例紹介】

70歳代前半、男性、右延髄梗塞にて入院。発症から41病日目に当院回復期リハビリテーション病棟へ転院。入院時の状態は、Br.stageは両側上肢・下肢ともにⅥ、両上肢・下肢筋力GMT4、片脚立位が左右共に1秒未満、ワレンベルグ症候群による左上下肢の温度覚鈍麻がみられた。ADLはU字歩行器使用にて自立、入浴以外のセルフケアに関しては自立であり、Barthel　Index（BI）は85点であった。家族は妻と二人暮らしで、妻の希望は、「身の回りのことが自分で行なえ、ちょっとでも農作業ができたら」との要望であった。

【結果】

生活行為向上マネジメントシートの使用により、生活行為を妨げている要因、現状能力、予後予測を文字に起こすため、ケースに対して説明しやすかった。それに加えて、合意した目標をケースとOTが共有し、3ヶ月後の目標達成のためのプログラムの導入も行ないやすかった。基本練習では、バランス練習を中心に行い、応用練習では、屋外歩行や不整地歩行、病院の畑を耕し野菜を植えた。社会適応練習では、自宅の田んぼの稲刈り作業を行なった。コンバインの運転、前かがみ姿勢で鎌を持っての稲刈り、田んぼの中を足袋で歩く、稲を乾燥機に入れる作業などを実際に行なった。それに加えて、田んぼの水を確認するための移動手段として自転車に乗ることが必要であったため、自転車練習にも取り組んだ。この様に、きめ細やかな作業療法の提案により、目標達成に向けて実際に行なったことが自信につなげることができ農作業の再獲得に至った。

【考察】

MTDLPは、対象者自身が作業療法を理解しやすいツールであると考える。OTが、生活行為アセスメント

と生活行為向上プランを文字に起こして説明するため、対象者はプログラムの必要性を理解し受け入れ易いと考える。

今後は、OTの経験年数関係なくマネジメントできるようになるため、実際にマネジメントしやすい対象者から行い経験値を高めていくことが必要であると考える。